

職人の技

シリーズ②③ 〈バイオリン製作者〉

陳昌鉉 さん

世界で数人という「無鑑査製作家の特別認定とマスターメーカー」の称号を授与された陳さん。つまり彼が

製作したバイオリンは、その瞬間、世界から認められた名器ということになる。だが1976年、世界的コンクールの受賞により世に認められるまでの道のりは、優雅に響くバイオリンの響きとは正反対の、文字通り汗と泥の中でもがく日々だった。

「昭和25、6年の大学時代、終戦の後、世の中が灰色の中の青春時代。寂しいから、心のわびしさを埋めるために趣味でバイオリンを習っていたんです。音楽やっていたのは、きれいな女性を見てもおなかかすいてプロポーズする元気がなかつたから（笑）。その時は、

まさか自分の本職になろうとは、想像もしていなかったけれど」

時代背景だけではない。陳さん自身、学校の先生を目指すも、さまざまな問題でその道を閉ざされ、半ば絶望の中にいた。そのとき、偶然に出会ったのが、後に「日本のロケット工学の父」と呼ばれるようになった糸川英夫博士の講演だった。テーマは、当時博士が挑んでいた名器ストラディバリウスの音の科学的な証明。

「『音の波形は似てきたのだけれど、実際作ると似ても似つかない音なんだ』と先生は

がっかりして、もうあきらめたというんです。そこで、僕の運命を変えたのは、先生の結論。『20世紀の最先端の科学技術をもつてしても、ストラディバリウスを解明し、再現することは絶対不可能である。これは人類の永遠の謎だ』と。

その言葉に僕は飛び付いた。よつほど夢に飢えていたんですね。夢がなかつたんだ。一般の日本の学生も、僕も（笑）」

現在まで、陳さんを動かし続けてきたのは、まさしく夢への飢えであり、そしてこのときから始まったストラディバリウスへの挑戦という執念。人生のシナリオはなかなかハッピー

な場面を与えてくれなかった。素人の学生を弟子に採る人ではなく、働き口の製造工場にもシヨップにも断られ続けた。だから細い細いつてをたどって、いい素材が手に入る長野の山中に小屋を建てて、そこで独学で挑んだ。まさに執念。

「そういう時代だったんだ。

これも運命。あまり運命に對してああだこうだ言うもんじゃない。自分の考え方次第で、自分の運命が良くなる場合だつてある。運命は自分で作るもの。どうしても好奇心を満足させたいという執念があつたんです。誰も作れないというなら、俺が作れたらカッコイイだろう、って」

「執念」という名の、才能。

進化、革新。ほかのジャンルでは日々当たり前のように行われていることが、バイオリン製作の世界では、通用しない。もちろん使いやすいバイオリンは、研究の成果や製造技術の進化で生まれているが、むしろ源流にさかのぼって真理を見つけないければならない、重く強大なテーマがある。そう、ストラディバリウスの存在だ。「現代の科学、物理の知識だけじゃできない。錬金術



文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase

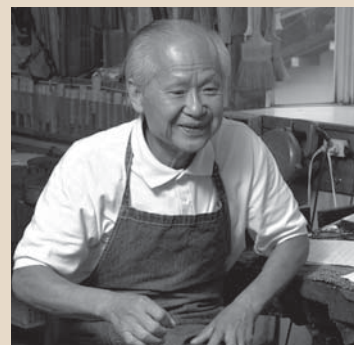
写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto



者の感性とかひらめきが必要。エジソンだって体系的な教育を受けていない。自己流だから科学者が想像も付かないひらめきで蓄音器を発明しました。そもそもストラディバリ自身、弟子にも見せずに錬金術師の執念と感性で作りを上げた。そ

れが面白い」
それにしても、この執念。若いころは挫折の連続、今は名声と安定を手に入れた。状況は変わった。でも、その熱は変わらないのだ。
「お金なんかじゃない。バイオリン作りに恋をしたんだよ。

恋は盲目。自分にとっては最高の恋人がバイオリン作りなんです（微笑）」



PROFILE

ちん・しよげん

1929年韓国に生まれる。1956年明治大学英文科卒業。1976年フィネデルフィアにおけるアメリカ国際バイオリンピオラチェロ製作者コンクールにおいてバイオリン・ピオラチェロの音響と細工の全6種目中5種目ゴールドメダル受賞。1984年アメリカバイオリン製作者協会より無鑑査製作家の特別認定とマスターメーカーの称号を授与される。1998年日本文化振興会より国際芸術文化賞受賞。2008年韓国において国民勳章無窮花賞を受賞。